

Social

～神奈川大学 社会教育課程 2022 年度前学期報告～

Coordination letter



かながわユースフォーラム
「六角橋商店街にポニーがやってくる!」(P.9)
スタッフ集合写真

～環境は人を育てる～

社会教育課程は、人と人、人と組織、人と地域をつなぐ「ソーシャルコーディネーター」の育成を目指している。2020 年度にカリキュラム改革を行い、育った学生は4年生へ。念願の公務員合格が叶った学生、大企業の商品開発、人材育成系、鉄道、ホテル業など、地域をフィールドにしながら、新たな価値を創出する仕事、人間に活力を与える仕事、正に学びがキャリアに生かされた。一人ひとりが学び合い、想像以上に成長。コロナにも負けなかった。

『社会教育の終焉』（松下圭一 1986、筑摩書房）は1980年代に書かれた本である。文部科学省における「生涯学習政策局」や「社会教育課」の位置づけが不明瞭となり、社会教育施設の民営化が進む只中である。しかし、社会教育が終焉した、とは言えない。むしろ、リスクリング社会が強化される今こそ、生涯にわたる学びが重視される方向ともいえる。

コロナ禍だからこそ気づいた、人間同士の温もり、人間の活力を生み出す、こうしたきっかけづくりが求められている。学びへの環境は人を育てるものである。

これからも、未来を担う大学生を中核に、ユース視点からの発信を続けていきたい。

神大の社会教育課程は、今後も教育イノベーションしていきます。

神奈川大学 資格教育課程センター（社会教育課程）

人間科学部人間科学科 教授 齊藤ゆか

実践報告2022

〈MMC：地域デザイン演習Ⅰ〉

小田原玉ねぎプロジェクト

開催日時：2022年5月7日（土） 10：00～16：00

開催場所：小澤農園（小田原市小竹）

参加人数：履修者6名（国際日本学部4名 外国語学部1名 経営学部1名）
他9名

担当教員：磯田浩司 非常勤講師



○コンセプト：ローカルな知を学ぶ

ローカルSDGsの推進の一歩として、
第2弾「おだわらプロジェクト」

○小田原市の農業について

（小田原市農政課 片野徳教氏より）

■地域課題

- ・農業従事者の高齢化、担い手・労働力の不足
- ・有害鳥獣や外来生物による農作物被害
- ・経営耕地の減少

■目指す姿

- ・地域農業を支える人材の確保・育成
- ・有害鳥獣への対応→ジビエ利用の拡大、捕獲活動の強化
- ・特産品のブランド化
- ・農業体験の機会創出・情報発信

○学生ニーズ

世代や地域を越えた交流がしたい、心躍る未知の
体験がしたい、私の「役立つ」を体感したい

○学習方法

ワークキャンプの手法を活かした社会教育プログラムの
体験を通して、実践力を高める。

数えきれないほどの玉ねぎ！



地域の皆さんと一緒に！

○連携・協力

小田原市農政課 片野徳教氏

小澤農園 小澤明人氏

JAかながわ西湘青年部 岸幸雄氏

○内容

耕作放棄問題や、農業の担い手不足を抱える小田
原市のたまねぎ農家で、玉ねぎの収穫から発送準
備作業を体験し、地域の人や学生同士の繋がりを
作る。

9：40 JR東海道線二宮駅集合

10：00 小澤農園到着

- ・小田原市農政課より「小田原の農業の現状」
- ・農作業の方法を聞き、玉ねぎを収穫する。

12：00 昼食、オリエンテーション

13：00 出荷準備作業、農家さんからの講話

16：00 解散



農業の課題を知る

■私たちは今回出荷作業まで行わなかったが、それでも自分達の収穫した玉ねぎのどれくらいの量が消費者の手元に届くのかということが気になり、目の前にある玉ねぎの行方が心配でたまらなかった。



そして、何より農家の方々が

いるおかげで、食物を育て、収穫、市場に出回るという一連の流れを無事に行うことができるのだということを感じた。無事に市場に出回るところまでいけば、私たちは生命を維持することができていないのだと思うと、普段、なんて甘えて生きているのだろうという気持ちを抱いた。農業体験をしたことで、農業で生計を立てている人たちの思いや苦悩、食べ物をいただくことのありがたみを知ることができたので、大学生になってからこのような経験ができたのは貴重だったと思う。

(国際日本3年 N.M)

■私は今回の小田原実習を通して沢山の感情の変化を経験しました。実習に行くまでは、あまり触れたことの無い玉ねぎの収穫や農家の 人々に会えることがとても楽しみでした。いざ実習当日になり、小澤さんや岸さんの高齢化やブランド化への熱心な思いといったお話を聞いて、自分の今までの知識の不足に少し恥ずかしくなりました。しかし、学年や年齢や立場関係なくみんなで他愛のない話をしながら作業することで、1人であししようこうしようとしていた自分がいなくなっている気がしました。今回の実習は地域の人々との連携の大切さだけでなく農家の現状や農作業の大変さ、幅広い年齢層との関わる新鮮さなど沢山のことを私に教えてくれ、とても刺激になる貴重な体験となりました。(経営2年 M.M)

■今回の下中玉ねぎの農業体験を通じて、農業の有り難さを感じました。私は野菜が好きで、特に玉ねぎは幼少期の頃から大好きでした。そんな玉ねぎの収穫をして、出荷するまでの過程を知ったり、農業体験をしたりするうちに、日々農業をされている農家の皆様に有難みを感じました。今私たちが美味しい野菜を食べられるのは、農家の皆様のおかげでもあることを、この農業体験を通じて理解することが出来ました。今後の食事にも農家の皆様に感謝して頂こうと思いました。(外国語3年 K.Y)



■複数人で同じ気持ちを共有し合うことでより充実した体験になった。小澤さんの畑では家族で農業をし、ときどき仲間が手伝いに来るという話を聞いた。1人でやるよりも複数人で作業をすることで効率が良くなる。農作業中に農家の方が「学生さんたちと一緒に話しながらすると時間があっという間だ」と話していた。私もあっという間に時間がすぎて驚いた。同時に、農家の方の生の声を聞きながら、作業への気持ちを共有し合い、農作業を学べるという密度の濃い時間だったと思う。これは複数人で1つの作業をすることのメリットであると考えます。またこういった機会があればぜひ参加したい。(国際日本2年 I.C)



■イノシシによる農業への被害が甚大という山間部の農業の問題点を当事者の方から話が聞けて、本で学ぶ以上に記憶に残りました。オレンジなどの果実も食べてしまうイノシシは他の地域よりも美味しい肉になっていると仰っていて、食べてみたくなりました。小澤さんの奥様とお話をしているときに、岸さんの家ではタマネギを収穫した後、その畑に田植えをするということを聞き驚きました。小田原はタマネギ収穫が5月であり、田植えも5月から始まるから、時期が重ならないからだそうです。私の実家もタマネギとお米を育てていますが、必ず別の土地で育てます。実家の長野県安曇野市は標高が高く、気温が小田原より低いです。そのため、タマネギの収穫は6月になり、田植えは5月に始まるのでお米とタマネギを同じ土地で育てることは不可能になります。地域の環境に合わせたそれぞれの野菜の育て方があることを発見しました。今回、ワークキャンプのような実習に初めて参加しましたが、みんなと一緒に共通の仕事をやり切った達成感は最高でした！広大な畑にタマネギ、マルチがなくなったという目に見える結果があり、「お疲れ様」と言い合える仲間がいることでより実感が湧きました。反省として、作業に没頭すると黙って会話をしなかった時があったので、作業と会話を同時に楽しめるようになりたいと思います。

(国際日本3年 I.K)



実践報告 2022

〈YC：地域デザイン演習Ⅱ〉

川崎市子ども夢パーク実習

開催日時：2022年5月4日（水・祝）～7月29日（金）のうち7日間開催

場所：川崎市子ども夢パーク

参加人数：15名（法学部4名 経済学部1名 人間科学部10名）

担当教員：西野博之 非常勤講師

地域デザイン演習Ⅱ（担当教員：西野博之非常勤講師）履修者15名の実習を、コロナウイルス感染拡大防止の観点から、7日間に分散して行いました。

○目的

プレーパーク（冒険遊び場）の運営現場での実習を通し、多様な他者との出会い、リアルな体験活動を行うことによって、困難な課題に向き合える実践力を育みます。様々な背景を抱える子どもたちとの直接的な関わりを通じて、子どもの気持ちの受け止め方を学び、子どもが発する「試し行動」に、どのように向き合い、コミュニケーションを図っていけるようにするかを学びます。

○場所

「川崎市子ども夢パーク」

〒213-0033 神奈川県川崎市高津区下作延5丁目30-1

<https://www.yumepark.net/> <https://www.tamariba.org/>

○日程

日程	参加者数	実習内容
5月4日（水・祝）	2名	スタッフ、子どもたちと共に遊具の製作を行い、一緒に遊ぶ。 7月17日・18日においては、「夢パまつり」の前日準備、運営を行う。
5月5日（木・祝）	2名	
6月25日（土）	4名	
6月26日（日）	2名	
7月17日（日）	13名	
7月18日（月・祝）	6名	
7月29日（金）	1名	

○当日の様子

7月18日（月・祝）に開催される夢パークの一大イベント「夢パまつり」に向け、前日の17日（日）には、裸足で駆け回る子どもたちが危なくないように、小枝や石ころを拾い、踏み固められた地面を鍬やスコップで耕して柔らかくするなどの作業を行いました。また、夢パまつりのために特別に設置されたウォータースライダーの安全な運営のために、学生が自ら滑ってみて安全性を確認し、必要に応じて補修するなどの仕上げ作業に取り組みました。その他、臨時のシャワー小屋の設営や、使用しないハンモックの取り外し、薪割り、日よけネットの設置など、慣れない道具の使用や、脚立に上っての高所の作業などにも積極的に挑戦し、学生どうし協力し合いながらやり遂げました。

7月18日（月・祝）のまつり当日は、受付、駐輪場、ドラム缶風呂、ウォータースライダーなどの担当に分かれての準備から始まりました。11時、いよいよ開幕！ドラム缶用の薪割りや入浴のお手伝い、ウォータースライダーやアスレチックの待ち列の整理などを行い、学生自身も思いっきり泥だらけになりながら、来場した多くの子どもたちと関わりました。16時に閉幕した後も、自分自身で今何をすべきかを考えながら、スタッフと共に片付けを行いました。

今回の実習では、「子どもの居場所におけるスタッフの役割」がレポートのテーマであったことから、夢パークのスタッフが、どのように安全管理を行っているか、子どもや保護者にどう目配せし、どのような声掛けを行っているかに特に着目しながら実習を行い、学生それぞれに学びを得ていました。



ごみ拾いも明るく楽しく

夢パークに入ってきて1番はじめに通る場所を担当するにあたって、スタッフさんから「テーマパークに来たかのような明るさで出迎えるように」と教えてもらった。スタッフさんは「おはよう！」と声を掛けたあと、「その服かわいいね！」「今日は何して遊ぶのか！？」などと、さらに一言話しかけていた。子どもは3秒目を合わせると必ずリアクションを返してくれるそうだ。そこで、手を振りながら笑顔で挨拶をすることを心がけたところ、何らかのリアクションが返ってくることが多く、とにかく明るく接することが大切であると感じた。

パーク内のドラム缶風呂やアスレチックでは怖がる子どもも見受けられた。そのときに、一緒に居た親御さんは「怖かったら止めておこう」と声を掛けていた。しかし、スタッフさんは「大丈夫だから、1回だけやってみな！」と背中を押すような応援の声かけをしていた。実際にそれで行動に移して挑戦していた子どもたちもいて、声のかけ方や、明るいトーンで話しかけることによって気持ちの向き方が変わるのだと実感した。(経済2年 A.R)

スタッフの皆さんが、遊びの中で子どもたちがする様々な提案を全て肯定していたのが印象だった。「いや、それは出来ないんじゃないかな…」と私が思ってしまうことでも、「いいじゃん！やってみなよ！」とどんどんやらせて、「わざと失敗させる」という場面もあった。大人は「いや、それは出来ないからこうした方がいい」と、やる前から代替案を提案しがちだが、大人に言われてやらないよりも、子どもが実際に失敗してみて、これはできないんだ、と学ぶ方がよっぽど子どもの成長に繋がると思った。スタッフは、常に「子どもがより成長する」手段を選んでいて、大人の出る幕と出ない幕の上手な使い分けを、色々なトラブルに遭遇しながら体得しているのだと思った。(人間科3年 S.H)



ウォータースライダーを実際に滑ってみて、危なそうな箇所はすぐに補修！



馴れない道具を使いこなすことも勉強

夢パークで遊ぶ子どもたちとスタッフの間には、大人と子どもの境界があまり感じられなかった。下の名前呼び合っていたり、夢パーク内の遊具の配置について相談したりと、お互いに「同じ空間を共有する存在」であった。そして、スタッフが子どもたちに指示や行動を押し付ける様子も全く見られなかった。子ども同士の言い合いへの対応も、彼らが仲直りすることを優先するものではなく、お互いの気持ちを尊重するものであった。子どもの居場所を居場所として存在させるためには、スタッフが子どもたちを一人の人間としてありのままを尊重し、彼らの居場所を守ることが重要なのだと感じた。(人間科2年 Y.Y)

夢パークには、たくさんの種類の遊び場があり、話すと面白いスタッフの方々がいて、とても良い環境だったので、子どもの頃にこのような場所が家の近くにあれば絶対に利用していただろうと思った。良い環境だからこそ、かつて利用者だった子どもが大人になったとき、夢まつりのようなイベントでボランティアスタッフとして運営側に回り、これまでやってもらってきたように子どもたちを楽しませるという良い循環ができているのだと感じた。

(法3年 Y.H)

西野先生、スタッフの皆さんと一緒に。笑顔から活動の充実ぶりがうかがわれます◎



実践報告2022

〈YC/MMC：地域デザイン演習Ⅳ〉

かながわユースフォーラム2022

開催日時：2022年7月9日（土） 13:00～16:00

開催場所：神奈川大学 3号館3階

参加人数：運営32名（法学部6名 経済学部6名 人間科学部10名 国際日本学部2名
外国語学部3名 大人5名）、参加者242名 計274名

担当教員：長浜洋二 非常勤講師・高城芳之 非常勤講師

■コンセプト

《地域に「輪」を拡げる》

コロナ禍で人と人との出会いやリアルな参画の機会が失われている。

そこで、若者（ユース）が考える体験の「輪」を拡げ、人と人、人と地域、地域同士のつながりを強化する。

■目的

～実践力に富む人材育成を目指して～

①成長支援：ユース（主に大学生）による社会参画型交流事業の運営実施。学生みずからが、主体的に地域・社会課題へチャレンジ（企画・運営・実施）することを通じて、「実践的能力」を身につける。大人は多彩な地域貢献活動・ボランティア活動を介して、成長支援を行う。

②地域社会との交流推進：新型コロナウイルスの影響により失われた、地域における体験・挑戦の機会（地域参画）や、世代を超えた交流、新たな人との出会いやつながりづくりの機会創出を行う。

③潜在層への支援：潜在的な学生ボランティア層に向けて、「地域の未来に何ができるのか」、社会課題・地域課題の解決に向けたテーマに対して、学生同士が考え、議論し、提案する機会の設定を行う。また、大人たちは学生たちを見守り、応援する。



■実施主体

かながわユースフォーラム実行委員会 2022

（神奈川大学 社会教育課程）

○実行委員長

齊藤ゆか（神奈川大学 社会教育課程 専任教員）

○全体ディレクター

長浜洋二

（モジョコンサルティング合同会社 代表）

高城芳之

（NPO 法人アクションポート横浜 代表理事）

○学生代表：田中英資（神大3年）

副代表：久保文乃（神大3年）

■協力

- ・横浜市
- ・横浜市教育委員会
- ・神奈川区社会福祉協議会
- ・六角橋地域ケアプラザ
- ・六角橋商店街連合会
- ・斎藤分町南部町内会
- ・神大寺学童クラブ
- ・近隣中学校
- ・横浜市三ツ沢公園野外活動センター
- ・（公財）ハーモニセンター
- ・NPO 法人アクションポート横浜
- ・JYSP（神大ユースサポートプロジェクト）
- ・人間科学部
- ・専門ゼミナール有志

■助成金等

横浜市神奈川区 かながわ地域支援補助金事業

（公財）さわやか福祉財団 地域たすけあい基金



■プログラム

「かながわユースフォーラム 2022」
～地域に輪を拡げよう！～

【全大会】

5つの分科会に分かれる前のイントロダクションを行うとともに、参加者がそれぞれ興味ある分科会の「旅」から戻ったあとのリフレクションを共有する。



会場は満席でした！

【分科会】

○「商店街×地域の子ども・大人」

感染症蔓延により地域の『輪』が狭まっている。「商店街にポニーがやってくる」イベントにより、来街のきっかけ作りや新たな繋がり・発見の機会創出を行った一連の報告。

○「子ども×スポーツ」

人と自由に話したり、遊んだり、当たり前のことが困難となった現代で、子どもたちにスポーツを通じた交流の機会を作りたい。そんな思いで立ち上げたプログラム報告。

○「子ども×企業」

横浜市教育委員会が主催する、「子どもアドベンチャーカレッジ」という子どものお仕事体験の企画運営を通して、未来を担う子どもたちと社会を動かす企業が交流をしていくサポート経過を報告。



○「子ども×エコ」

三ツ沢公園野外活動センターが行う「あったかエコキャンプ」に参加し、当日行ったアンケートを元に、子どもと親のニーズに合うイベントを考える。

○「町内会×若者」

斎藤分南部町内会とコラボし、いつもの通学路に新しい出会いを創り、学生と地域の方との間に『輪』を生むことを目的とした、モスキートバスターズとヒューマンライブラリーのイベントの開催を報告。

○「学習支援×大学生」（JIN-KANA学習塾）

教師の力を育てることと、地域の中学生の学習支援をすることの二つの目的を持つ、神奈川大学教職課程に公認された活動である JIN-KANA 学習塾。活動の仲間を大募集。

○「ジェンダー×イメージ」（荻野研修室）

男性が化粧をすること、女性が化粧をしないことについてどのようなイメージを抱くのか？そのような男女のイメージについて紹介し、ジェンダーについて話し合う。

○ボランティアマッチングブース

- ・神奈川大学学生ボランティア活動支援室 「学生×ボランティア」
- ・東海大学ボランティアグループ 「ボランティア×学生」
- ・平塚地区 BBS 会 「学生×更生保護」
- ・地域活性化実践発表 「小田原×学生」
- ・健康チェック（笹川研究室） 「身体×大学生」

【分科会の概要】

- ・1クール 20 分で、3 クール実施。
- ・実施したイベントの報告を行いつつ、参加者との質疑応答や対話、交流を行う。
- ・参加者は最低 2 つの分科会に参加必須。1 クール分はブース見学や交流等可。
- ・報告終了後、アクションカードとサンクスカードに思いを記入し、振り返りの木に貼る。



■参加者概要

学生運営スタッフ	27 人
運営大人スタッフ	5 人
学生ボランティア	6 人
卒業生ボランティア	6 人
参画団体 (5 団体)	33 人
参加者	197 人
全参加人数	274 人

■参加者の声

【学生代表 田中英資 (法学部3年)】



私はこの団体の学生間、地域間における認知度を上げ、より多くの人に参加してもらいたいという思いから活動に参加させていただきました。結果として、7月9日には約200人の方に参加していた

だき、各分科会で様々なリフレクションを貰うことができました。その中で、ほとんどの班で、このような活動を私もしてみたい、学生が主体でここまでやり遂げることが出来ていて凄いなどの労いの言葉や今年の企画の改善点、更に新たな企画案があり、参加していただいた学生が主催者の視点を持って臨んでくれていたことが非常に印象的で、また来年度以降の活動継続、発展に期待できそうなものばかりであったため、私の目標は達成できたのではないかと考えます。また、多くの人やコアメンバーをはじめとする多くの学生に支えてもらうことでここまで出来たので、感謝を忘れず、これからも地域の人間の一人として様々な方々と関わっていききたいと思います。約7ヶ月間、本当にありがとうございました。



【参加者アンケートより】

- 全体の時間が最初は長いと思っていたけど、短時間で話題が変わったので飽きずに楽しめた
- 自分が知らない所で様々な企画を実施していて、すごいと思った。どの分科会の報告発表も面白かった。
- 20分と短い時間でもとても中身の濃い内容になっていて面白かった。
- 自分が知らない活動を色々やっていて、とても関心した。自分の中でのボランティアに対する視野が広がった。
- 地域交流などを考える活動は普段参加することがないのでいい機会になった。
- 横浜だけでなく、みなとみらいも団結して大きな組織を作り上げていて驚いた。



【今後の期待】

- 神大の中でも多くのボランティアが存在することを知り、面白そうな企画があれば参加したいと思った。
- 学生が主体となって企画をしていて、その内容が良かったのばかりだったのですごいと感じた。社会教育課程を取得したいと考えているので、企画力や自分の意見を持ってそれを伝える力を伸ばしていきたいと思った。
- かながわユースフォーラムを知っている先輩(卒業生)がいたので興味がわいた。教職課程をとっているならやってみた方がいいのではないかなと思った。



※詳細 <https://www.kanagawa-youth2020.net/>
(学生管理運営)

実践報告2022

〈YC：地域デザイン演習Ⅳ〉

六角橋商店街にポニーがやってくる!?

開催日時：2022年6月4日（土） 9：00～17：00

開催場所：六角橋商店街

参加人数：18名（法学部5名 経済学部4名 人間科学部9名）
他ボランティア 計約50名

担当教員：長浜洋二 非常勤講師 齊藤ゆか 専任教員

補佐：地域コーディネーター 齋藤慎子 益田麻衣子



■事業目的

○新型コロナウイルスの影響により失われた、地域における体験・挑戦の機会(地域参画)や、世代を超えた交流、新たな人との出会いやつながりづくりの機会の創出。

○通勤通学路でもある駅前の商店街通りの利用促進、これまで商店街に馴染みがなかった近隣住民（新しい風）を呼び込む仕掛けによる商店街の活性化。

■実施内容

○出張ふれあい動物園

- ・ポニー乗馬体験
- ・ミニチュアポニー、モルモットとのふれあい

○商店街スタンプラリー

- ・商店街にある店舗と連携して行う
- ・空き店舗を活用した催し



■当日までのステップ

2022年2月

「商店街に動物を呼んだら面白くない？」ちょっとした好奇心からスタート。

2022年3月

学生たちで、茨城の「小貝川ポニー牧場」を訪問。改めて六角橋商店街に挨拶と説明を行い、企画書を作成。

2022年4月～

助成金申請（さわやか福祉財団・地域助け合い基金）を学生たちが書く。

2022年5月～

学生ボランティアを募集。タウンニュース（神奈川区）取材を学生が受ける。

現場打ち合わせ、プログラムを相談。ボランティアのシフト、指示書を作成。

■連携・協力

- ・六角橋商店街連合会 ・神奈川区役所
- ・（公財）ハーモニセンター

<https://harmonycenter.or.jp/>

- ・（公財）さわやか福祉財団（地域助け合い基金）

ポニー（エサやりと乗馬）：計647人（子ども329人・大人329人）モルモットとのふれあい：計360人
約1000人の親子連れで、商店街は賑わいを見せた。

商店主さんや神奈川区区役所の方から「沢山のお客さんが商店街に来たのは、本当に久しぶりだ」「お子さんがこんなに沢山いたんだ」「動物パワーすごいです。神奈川区でこんな賑わいはホント久しぶり。いいですね～」とのお言葉をいただいた。

コロナ禍から2年。全てのイベントは中止されてきた。

学生街だった「六角橋商店街」も、食べ歩く学生はなく、商店街と学生との強い絆も、新しい学生は知らない。誰かが「地域と大学とのつながり」のバトンを受け取り、学生たちが、授業内外でリアルを体験する出番が必要。コロナ禍で淀んだ街中の空気感と他者に対する不信感。若者パワーで、それを晴らしたい。まずは、小さなチャレンジスタート。

実践報告2022

〈MMC：社会教育経営論Ⅰ〉
小田原フィールドスタディ（学び編）

開催日時：2022年6月25日（土） 9:30～16:20

開催場所：小田原市内

参加人数：履修者6名（外国語学部1名 国際日本学部5名）他社教2名

担当教員：加藤憲一 非常勤講師



■目的

小田原における社会教育活動の状況について概括しつつ、歴史まちづくりの実情、担い手育成の取り組みである「おだわら市民学校」の傍聴、市民ガイドとの交流などを通じて、社会教育が人づくり・まちづくりに果たしうる可能性について理解を深める。

■実施内容

- おだわら市民交流センターUMECO
 - ・施設管理者「市民活動を応援する会」
 - 代表 椎野典子氏
- 小田原文学館、白秋童謡館 見学
- 旧松本剛吉別邸 見学
- 小田原市生涯学習センターけやき
 - ・市生涯学習の取り組み 生涯学習課 遠藤副課長
- おだわら市民学校
 - ・おだわら学講座受講「地域活動の意義と現状」
 - ・一般社団法人とちぎ市民協働研究会
 - 廣瀬隆人代表理事
 - ・小田原市地域政策課 岩田課長
 - ・参加学生よりコメント
- 市民ガイドによる史跡小田原城跡および報徳二宮神社見学
 - ・NPO法人小田原ガイド協会 堀池衡太郎会長



小田原文学館



旧松本剛吉別邸

■学生感想

○今回の小田原学習を通じて、小田原市の社会教育活動や小田原の特性について学ぶことができた。小田原は山・川・海・平野と自然環境が整っており、様々な人が助け合いながら居住している。自然豊かな場所であるため横浜とは公共交通機関の利便性が大きく異なっている点は改めて新鮮味を感じた。おだわら市民学校の傍聴では、講師からの「地域ごとにできることが違う。先人の事例を学べ」ということが特に印象に残っている。それぞれの地域の特性を考慮しながら、今後の活動に生かしていきたい。（国際日本3年 H.S）

○今回の小田原実習で小田原市の良い部分を知ることが出来た。駅を降りた瞬間から小田原市民の穏やかな雰囲気を感じられた。自分の地元である静岡と雰囲気が少し似ているという印象が一番強く残っている。海や山など自然豊かな景色が広がっていた。市民交流センターや文学館、生涯学習センター、史跡小田原城跡を見て五感を磨くことが出来た。特に、小田原城のガイドが面白かった。鎧の仕組みや構造の違いなど今まで知らないことを知れ、日本の歴史は奥深く感慨深いと思った。（国際日本3年 H.A）



小田原の名所を一巡り！

○小田原でのフィールドワークを通して、小田原の歴史と人柄、町の景観とその背後にある市政について、鮮明に知ることができた。小田原市民の方々は、個人がしっかりした意志や行動力を持っており、「自立した市民」という印象を抱いた。社会教育の実践が生きている証だろう。小田原市生涯学習センターで「おだわら学」講座を受講した際、取り上げられている項目や活動については授業で聞いていたものだったため、その知識と比較する形で話を聞けて、より深い学びになった。日頃から質の高い教育の機会をいただけていることが嬉しい。今後、社会教育を学習してきた経験に誇りと自信をもって、自分も「まちづくり」「ひとづくり」の種を蒔いていけるような人間に成長したい。（国際日本3年 N.M）

○私は小田原に初めて足を運び、普段生活している場所と同じ県内なのにも関わらず、全く違う地域に感じました。おだわら市民学校の授業を受けている中でも、先生のお話に、地域によって問題が違ふということが述べられていました。お買い物のサポートをするバスの話を聞いて、現在私が携わっている神奈川区斎藤分町のお買い物支援バスとは経緯もアプローチ方法も違い、類似した出来事でも様々な方法があると知り、参考に出来るところをよく学んでいきたいと思いました。（外国語3年 K.A）

○今日は座学で学んだコト・モノを現地で実際に歩いて回って見るという貴重な学習体験ができました。UMECOでは実際に活動をしている市民グループ、生涯学習センターけやきで地域活動について学ぶ市民学校の方々の姿を見て、自身も改めて気が引き締められました。また小田原文学館や旧松本剛吉邸、小田原城を巡り、小田原の市街を観光地として楽しむこともできました。今回の実習はとても充実したもので、「小田原にまた来たい」と思えるものでした。

（国際日本2年 S.S）



白秋童謡館の庭



小田原市民とともに学びました

○小田原実習で最も印象に残ったのは、おだわら市民学校の授業だ。事前学習で聞いていたときはもっと行政中心の集まりなのかと思っていたが、当番制で参加者が司会や消毒を行っていて、講義以外の部分も地域で活躍する人材育成のための工夫がなされていて面白い。授業前にも受講生同士の交流が見られて、まるで高校にいるような感覚になった。あと5年、10年と経った時に小田原でどれくらいの市民がどんな地域活動に参加するのかが楽しみである。また、授業では小田原の良い側面を中心に聞くことが出来たが、市民の方が見る小田原のあまり良くない側面を聞き、リアルな小田原を知ることが出来た。今後小田原が進むべきステップなどを見いだせるかもしれない、より良い都市にするための伸びしろがあるように感じる。（国際日本2年 I.C）



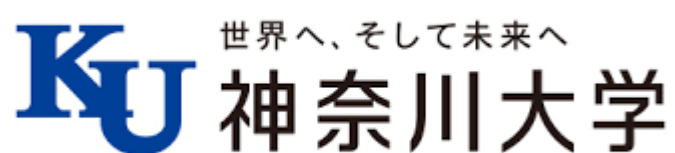
■小田原市職員より

社会教育を学ぶ学生の皆さんにまちづくりの担い手育成を目標にした「おだわら市民学校」の取組や運営の仕方を実際に見学いただき、皆さんの感想からそれぞれの熱意を感じとることができたことは、事業担当として嬉しく思いました。すでに地域活動など取り組んでいる方もいることを知り、市民学校の受講生も刺激を受けたと思います。今回は時間の都合で叶いませんでしたが、また機会がありましたら、講座聴講後に市民学校受講生と学生の皆さんとの意見交換等交流の場があるとお互い得るものはさらに大きくなるのではないかと感じました。

（小田原市文化部生涯学習課

遠藤・廣瀬）





2022 年 11 月発行

発行：神奈川大学社会教育課程 横浜キャンパス

神奈川県横浜市神奈川区六角橋 3-27-1

編集：神奈川大学社会教育課程 齊藤ゆか

地域コーディネーター 益田麻衣子・齋藤慎子

連絡先：神奈川大学社会教育課程 045-481-5661（代）

※本書の無断転載を禁じます。